

はじめに……………	竹内幸絵	5
凡例……………		

## プロローグ

創業者高木貞衛の広告理念と行動……………	山本武利	14
----------------------	------	----

高木貞衛の白いハンケチ……………	津金澤聰廣	43
------------------	-------	----

## I 『広告の夜明け』と萬年社

第一章 「屋外広告界に雄飛をなす」……………	竹内幸絵	48
------------------------	------	----

——高木貞衛の夢と戦前大阪の屋外広告への熱意

第二章 万年社と日本GM…………… 難波功士 77

コラム 高木貞衛のキリスト教…………… 菅谷富夫 96

コラム 万年社コレクションのチラシ広告…………… 大石真澄 100

第三章 万年社における連合広告——歴史・意匠・企画を中心に…………… 熊倉一紗 108

コラム 広告漫画と万年社…………… 松井広志 134

第四章 万年社コレクションにみるアジアの新聞と広告…………… 土屋礼子 142

II 「万年社コレクション」から探る広告史

第五章 大阪の広告業界に生まれた「水曜会」百年の由緒…………… 木原勝也 168

第六章 万年社と博覧会——「京都子ども博覧会」における新聞と広告…………… 村瀬敬子 197

コラム 京都岡崎の広告意匠展覧会…………… 樋口摩彌 220

	第七章	広告掲載料からみる雑誌メディア	石田あゆ	225
		—— 萬年社『広告年鑑』が示した戦前雑誌の広告効果		
		コラム 大学の新聞広告——同志社大学所蔵史料より	樋口摩彌	246
	第八章	アジア・太平洋戦争期における国家宣伝と広告業界	中嶋晋平	251
		—— 日本宣伝文化協会と『エホン ニッポン』		
		コラム 中国大陸における萬年社と海外進出——中島真雄の新聞活動と広告	華 京碩	282
		萬年社関連年表	木原勝也	291
		おわりに	難波功士	303
		執筆者紹介		
		索引		



## はじめに

竹内幸絵

### 『広告の夜明け』と大阪

日本の広告はどのようにして「夜明け」を迎えたのだろうか。

この問いに対する答えがし、つまり近代広告の黎明期へのアプローチは近年少しずつ増えつつある。しかしそれらに対して、私たちはある疑問を持つてきた。それは単に疑問というよりも不満、あるいは異議申し立てとでもいべきものかもしれない。この疑問が本書編纂の動機ともなっているのだが、しかしながら、広告に興味があり『広告の夜明け』という題名に魅かれて本書を手にしてくださった読者に、私たちのその疑問はなかなか理解してもらえそうにない。最初に少し字数を頂いて解説しておきたい。

題名に魅かれて本書を手にした読者は、続くタイトルにある「大阪」を見て、地方からロイヤル広告史にアプローチするのだな、と理解されたかもしれない。あるいはなぜ「大阪」なの？ と、違和感を覚えた方もおられることだろう。現在の広告業界に精通しておられればなおのことである。なぜ「東京」＝中央の話、ではないの？ と。

現在の日本の広告業界を見渡すと、広告制作会社からテレビ局や新聞社やインターネットといったメディア、そして印刷会社やシステム会社などの技術集団まで、つまり制作の始まりから拡散に到る終りまで、すべてが「東京」に集中している。それが今の広告業界の“あたりまえ”である。もちろん九州や名古屋、そして大阪に

広告業者が存在しないわけではないが、そのポリュームの差は圧倒的。テレビで、インターネットで、新聞で。私たちが日々眼にする広告の殆どすべてが今や「東京発」で占められている。

そして広告をめぐる研究の多くが、今日の広告の影響力分析に力を注ぐ。広告は実利を求める存在だからそれが社会に求められるのは当然のことであろう。さすれば広告研究が行う社会的・文化的影響力の分析、それはそのまま「東京発」のパワーの分析である。これが今日の広告研究の「あたりまえ」なのである。

ではこれらの「あたりまえ」に沿わず、「大阪」を「広告」に組み合わせた本書の眼目はどこにあるのだろうか。

『広告の夜明け』は近代広告黎明期の研究においてもこれまで、主眼は東京の事象の掘り起こしにあったといえるだろう。私自身も博士論文では、明治・大正・昭和戦前期に東京で出版された本や雑誌に注目して広告の近代史に取り組んだ。それは必要な仕事だった。しかしその調査の過程で見出した記事や広告現物や書籍は、今の「あたりまえ」とは大きく異なる常識を示していた。広告黎明期の東京と大阪には、今では考えられないほど均衡した関係があった。大阪が先行して広告事業を拡大し、新たな広告表現手法を編み出すなど東京をリードする局面も多くあったのである。両者は広告という新しい分野開拓への挑戦を繰り返し、切磋琢磨して互いを刺激し合う存在だった。

一方、広告周辺の事情については様々な分野の研究が、当時の大阪の活力をあきらかにしてきた。今日の日本にある一般的な新聞メディアの姿は、この時代に大阪の有力二紙によって形成されたものだ。その新聞に広告を発注する消費財企業や百貨店も、東西それぞれに実力者が存在した。印刷分野では細密な色刷りを求めれば大阪に白羽の矢がたつという状況にあった。このような広告にとってのいわばインフラストラクチャーが東西に

拮抗して存在していた。のみならず、近代的な広告表現を求めるクリエイティブの動きも、東西双方に重要な柱があった。東には広告研究の専門雑誌として『広告界』があったが、西には『プレスアルト』誌があった。広告表現に影響を与える芸術運動も東西に屹立し影響し合っていた。都市の出現と呼応する大正期新興美術運動でも東の「マヴォ」と、西の運動の交わりによって新たに「三科造形美術協会」が結成されたし、新聞広告とも深くかわる新興写真運動においても、大阪に一九〇四年という極めて早い時期に「浪華写真俱樂部」が創立している。ここに属した写真家たちは近代都市を切り取る重要な作品群を生み出した。彼らは戦時期には報道写真家となった。それは同時期の東京で写真史に画期を刻んだ雑誌『光画』とも肩を並べる重要な近代前衛写真運動として評価されているのである。

広告は社会的であり芸術的でもある複合的な存在である。多面性を持つ広告の周辺にあったこのような「状況証拠」からみても、大阪が『広告の夜明け』を開いていったメインストリームのひとつとして、確かに存在していたことが予見できるだろう。

メディア史研究の先達たち（レジュメ「おわりに」参照）は、一九七〇年代以降この東西の均衡をいち早く指摘し大著を著してきた。ところがそれらの成果から少しの時を経るうちに、過剰なまでに進んだ広告の東京一極集中が、先達の提言を見えにくくしてしまった。現前する東京主導の力が強靱で、強固な「あたりまえ」を形づくっており、史的研究においてもその枠から出ること自体が難しくなってしまうのだ。

しかしこれでは『広告の夜明け』の事実が埋もれてしまう。大阪が『広告の夜明け』の対角を担っていた時代につくられた機能や枠組みや組織、思考や精神そして表現、いずれもが、今日の広告の原型を形成したのである。今日の広告の文化的・社会的影響力を問うためにも、『広告の夜明け』の時代に起きた諸事を等閑視することは

できない。現在の大きな不均衡をきちんと差し引いたうえで『広告の夜明け』の再認識。これが私たちの本書の出版意図であり、異議申し立てである。

#### 本書の特徴と構成

『広告の夜明け』では、執筆者それぞれが「細部」にこだわって論じている。「細部」を掘り起こす作業でしか現在の強力な東京の引力を引きはがすことができないと考えたからだ。

そしてこれらの論考の背骨には、大阪で発祥した広告代理店、萬年社の資料「萬年社コレクション」を置いている。同社は今日誰もがその名を知る日本の巨大広告代理店よりも古い歴史を持ち、長らくそれと肩を並べる存在だった。同社の創業期間一一〇年の間に膨大な「萬年社コレクション」が形成されたが、これに興味を持ち、前述の疑問に賛同して『広告の夜明け』の発掘に共鳴した研究者が集うことで本書は形づくられた。メンバーは、歴史学、社会学、芸術学、デザイン史など様々な研究領域を足場とする、広告という多角的存在にふさわしいバラエティに富んだ面々である。そしてここには前出のメディア史研究の先達二人の力も加わっている。

第一部の四つの章は、これまで注目されることの無かった萬年社の詳細な活動を軸として、黎明期の広告の諸相に光をあてている。早くから海外進出を実現していた萬年社の動向を、残された新聞資料から検証し（土屋礼子）、複数の企業の広告がひとつの紙面を形づくる「連合広告」の成り立ちを分析する（熊倉一紗）。萬年社が外資トップ企業と専属契約を結んでいた事実を掘り起こし（難波功士）、屋外広告を実現しようとした萬年社と大阪の活動を探索する（竹内幸絵）。繰り返しになるが、これらは単に大阪という地方の一現象を回顧するものではなく、黎明期の広告業界をけん引した先駆事例である。

第二部では「萬年社コレクション」から発掘した資料に基づき、視野を戦前の広告業界全体に広げて『広告の夜明け』を検証している。初期の博覧会と広告代理店との密接な関係（村瀬敬子）、広告業者らの合従連衡とその意味の検証（木原勝也）。萬年社が発行した先駆的な年鑑『広告年鑑』から雑誌広告を読み解く（石田あゆ）。そして萬年社コレクション新出資料に基づく、戦時期に国家宣伝に協力した民間団体の活動（中嶋晋平）。それが、広告の興隆を目指して邁進した人びとの行動や記録を掘り起こし、黎明期の広告にあつた多角的な側面を見ようとしている。

そしてこれらに先立つ本書のプロローグは、メディア史研究の先達である山本武利、そして津金澤聰廣の二者によるものである。山本稿は、萬年社の固有性を経営成績をも織り込みながら俯瞰するとともに、創業者高木貞衛の手腕や思想をも広い視野から示している。津金澤稿はその高木の個人像をたおやかに描き、日本の広告をけん引した明治の実力者を彷彿させる魅力的な一文である。

#### 「萬年社コレクション」について

最後に「萬年社コレクション」のあらましを説明しておく。

先に示した通り長い歴史を誇った萬年社だが、一九九九年に残念ながら自己破産した。この際に残された様々な資料を譲り受けた大阪市立近代美術館準備室（現・大阪新美術館建設準備室）の菅谷富夫の協力を得て、二〇〇九年よりおよそ五年をかけて土屋をリーダーに、菅谷と竹内、中嶋、大阪市立大学の石田佐恵子をメンバーとして膨大な未整理資料の目録を完成した<sup>(1)</sup>。

目録では全体を紙・印刷資料とビデオテープ類<sup>(3)</sup>に大別し、紙・印刷資料をさらに、戦前資料と戦後資料（注…営業資料・博覧会資料など）とに分類した。本書はおよそ一万点ある戦前資料を主に参照しているが、本文随所で示

## 萬年社コレクション概要

大分類	中分類	小分類	
1) 図書類	(大阪新美術館建設準備室が管理)		
2) 引札類			
3) 紙・印刷資料	戦前資料	大型古資料 社史資料	9954点 610点
	戦後資料 (実務資料)	企業別ファイル イベント資料 広告作品 営業活動	204冊 312点 57点 376点
	ポスター類	古ポスター 1990年代ポスター	169点 266種
4) ビデオテープ類			8636点

※ 3)、4) の目録はウェブサイトにて公開。

※ 「企業別ファイル」は冊子内に多数の資料が保存されている。

※ 「古ポスター」は19世紀末～20世紀初頭のもの。

す通り、これらは同社が自身の業務のためにスクラップなどして保存していた広告や新聞資料、あるいは創業期の大福帳など経営資料や書簡、会合記録など極めて多様で雑多な内容を含んでいる。分類ではこの戦前資料をさらに「大型古資料」と「社史資料」とに区分した。執筆者はそれぞれの興味に引き込んでこれらを参照し、各章を書き上げた。難波、竹内、木原、中嶋の各章は、主に「社史資料」を、土屋、熊倉、村瀬、石田の各章は、「大型古資料」を主要な資料としている。

### 広告、大阪、萬年社。

本書の表題のキーワードを二〇歳前後の大学生に見せたなら、彼らは萬年という言葉の持つ響きからくる古めかしさに思いを馳せるかもしれない。そのような古めかしい名前を持つ歴史の長い広告会社の活動を軸に、『広告の夜明け』をひもとく。それは大阪の広告のみならず日本の近代広告の力の源泉を探ることもあった。決して地方<sup>ロカ</sup>ではなく、まぎれもなく「中央」であった大阪を手がかりに日本の近代広告史を開く。本書はそういう本を目指している。

- (1) 二〇〇九年時点で整理済みのコレクションに図書類・引札類があった。
- (2) 完成した資料目録は、「おわりに」に示したウェブサイトで検索可能(二〇一七年一月現在)。大阪新美術館が開館する二〇二一年度(予定)以降は、同館のアーカイブ資料の柱の一つとして、この目録に注(1)に示した図書類・引札類の目録を加えてまとめて検索できる仕組みを実現する予定。
- (3) ビデオテープ類を含むコレクション全体の所蔵点数等については、以下の石田論文が詳説している。石田佐恵子「エフェメラメディアを凝視する——萬年社アーカイブ・CMデータベースの事例から」(水島久光・原田健一編『デジタル映像アーカイブ研究の現在(仮題)』学文社、二〇一八年一月刊行予定)。

〔付記〕 萬年社コレクション整理プロジェクト(紙・印刷資料)は以下の助成金によって実現しました。

- ・ 吉田秀雄記念事業財団(二〇〇九—二〇一〇年度)
- ・ (株)毎日エス・ピー・シーからの研究寄付金(二〇一〇—二〇一一年度)
- ・ 大阪市立大学重点研究、新産業創生研究(二〇〇九—二〇一四年度) ほか
- ・ 日本学術振興会科学研究費「旧萬年社所蔵資料による大阪の広告史研究」基盤研究(C)、課題番号 24530638(二〇一〇—二〇一五年度)

## 【凡例】

本書で用いた萬年社についてのおもな基本資料は、以下の通りである。本文注記にあたっては、一部の書誌情報は省略した。

- ・『新聞広告十七講』出口郁郎編 萬年社 一九二八年
- ・『萬年社創業録』上・中・下巻、目録 萬年社 一九三〇年
- ・高木貞衛『広告界の今昔』萬年社 一九三〇年
- ・『萬年社四十年史要』萬年社 一九三〇年
- ・『高木貞衛翁伝』萬年社 一九五〇年
- ・『萬年社広告100年史』萬年社100年史編纂委員会編 萬年社 一九九〇年
- ・『広告論叢』(戦前) 第一～三〇輯 萬年社編・刊 一九二三年四月～一九四〇年
- ・『広告年鑑』大正四年～昭和四四年版 萬年社編・刊 一九二五年～六九年
- ・『旧萬年社・社史資料集』二〇一一・一二・一五年度版 萬年社コレクション調査研究プロジェクト編集・発行
- ・『大阪広告史データベース 萬年社コレクション』データベース <http://www.cit.osaka-cu.ac.jp/mannensha/> (萬年社コレクション調査研究プロジェクト事務局運営)

おわりに

難波功士

最後に、本書の母体となった「大阪メディア文化史研究会」についてご紹介させていただきます。以下、個人的な回顧にもとづくものなので、文体や敬称など、ややカジュアルになることをご容赦ください。

ことの発端をどこまでさかのぼるかは難しいところですが、メディア史研究のレジエントともいえるべき津金澤聰廣先生・山本武利先生・有山輝雄先生が関西の大学にそろっておられた時期があります。その成果が、津金澤聰廣・山本武利・有山輝雄・吉田曠二『近代日本の新聞広告と経営——朝日新聞を中心に』（朝日新聞社、一九七九年）です。主として大阪朝日新聞社を題材とした同書は、戦前のメディア界が、東京に大きな比重がおかれていた出版業界のようなケースもあるものの、おおむね関東・関西の二つの中心点をもつ、楕円構造にあったことを示しました。その後、山本先生・有山先生は関東の大学に移りましたが、各先生方が新聞史・広告史、さらにはメディア史全般に大きな足跡を残されたことは、言わずもがなのことかと思えます。

こうした関西のメディア界が有していた存在感の大きさは、津金澤聰廣編著『近代日本のメディア・イベント』（同文館出版、一九九六年）、津金澤聰廣・有山輝雄編著『戦時日本メディア・イベント』（世界思想社、一九九八年）、津金澤聰廣編著『戦後日本のメディア・イベント——一九四五—一九六〇年』（世界思想社、二〇〇二年）の三部作などでもふれられているところでは、

以上のようなメディア史（研究）の土壌と、大阪市立大学に土屋礼子さんが着任されていたことがあいまっ

て、今世紀に入り、関西にもメディア史関係の研究会をとの動きがありました。残念ながら土屋さんは関東に移られました。当時はまだサントリー勤務だった竹内幸絵さんを事務局に「戦時期広告史研究会」が立ち上がり、津金澤先生、時には東京から山本先生や土屋さんにお越しいただいての研究会活動がスタートしました。この一連の研究会での報告が、井上祐子『戦時グラフィック雑誌の宣伝戦——十五年戦争下の「日本」イメージ』（青弓社、二〇〇九年）、竹内幸絵『近代広告の誕生——ポスターがニューメディアだった頃』（青土社、二〇一一年）、加島卓『「広告制作者」の歴史社会学——近代日本における個人と組織をめぐる揺らぎ』（せりか書房、二〇一四年）、石田あゆ『戦時婦人雑誌の広告メデア論』（青弓社、二〇一五年）、熊倉一紗『明治・大正の広告メデア——「正月用引札」が語るもの』（吉川弘文館、二〇一五年）、田島奈都子『プロパガンダ・ポスターにみる日本の戦争——135枚が映し出す真実』（勉誠出版、二〇一六年）などへとつながっていきます。

そうした動きと、大阪新美術館建設準備室（当時は大阪市立近代美術館準備室）所蔵「萬年社コレクション」の整理作業が大阪市立大学などで進行していることが連動を始めます。同室の菅谷富夫主任学芸員のご案内で、萬年社が集めた引札のコレクションを目にする機会を得たりもしました。二〇一〇年からは「大阪メデア文化史研究会」として、津金澤先生を中心に『広告論叢』を読み直す研究会などが続けられ、時にはメンバーの多くが香港大学でのワークショップ「東アジアの広告に関する歴史研究」に参加するなどの出来事もありました。また、石田佐恵子さん（大阪市立大学）を中心に進捗している、萬年社コレクション中のラジオCMやテレビCMなど、映像・音声資料の整理の経過報告会に、研究会メンバーで参加・出席したりもしました。そうした経緯のなかで、本書に執筆している顔ぶれが研究会に揃うようになってきます。

せっかくの萬年社コレクションなのだから、それをもとにした研究成果を世に出したい。とくに、整理の進んでいる戦前の紙資料をベースにした研究から本にまとめたい。そんな機運が高まっていたタイミングで、思文閣

出版の大地亜希子さんが、同志社大学の竹内研究室のドアをノックします。本書にあるように同志社大学と萬年社とは深い関係にありました。大地さんが母校同志社大を訪れたことも何かの因縁かもしれませんが（のちに大地さんと熊倉さんが同じサークルに所属していたことも発覚しました）。

そこからの研究会活動の中心は、本書の各論文やコラムの分担執筆者が構想を発表する場となつていき、萬年社研究に先鞭をつけられた山本先生・津金澤先生からもご寄稿いただくよう編集作業へと入つていきます。その間、よく伴走いただいた大地さんと、研究会の実施をサポートいただいた北廣麻貴さん（同志社大学社会学研究科）には心から感謝いたします。

またもつとも感謝すべきは、倒産した萬年社の資料が大阪から散逸することを恐れた篤志家の方々、ならびに萬年社コレクションの整理に助成いただいたさまざまな組織・団体の皆様です。詳細は萬年社コレクションのホームページ（<http://ucrc.lit-osaka-u.ac.jp/nannensha/index.php>）をご参照いただければと存じますが、皆様のお力添えなしに本書は存在しません。そして萬年社コレクションはもちろんのこと、関西には数多くの広告史研究の資源が残されています（山田奨治編『文化としてのテレビ・コマーシャル』（世界思想社、二〇〇七年）、高野光平・難波功士編『テレビ・コマーシャルの考古学——昭和30年代のメディアと文化』（世界思想社、二〇一〇年）など参照）。本書の出版をきっかけに、それらの活用がいっそう進むことを願つてやみません。

さらに言えば、この国のメディアの生態系が、多くの中心をもつ同心円の重なり、もしくは多くの中心の多様なネットワークとなつていくことを願わざるをえません。一極集中の弊害が叫ばれる昨今、戦前の関西メディア史は、たんなる懐古ではなく、未来への知恵となりうるものです。萬年社の挫折から、関西メディア界の栄枯盛衰から、われわれはまだまだ多くを学びうるのではないでしょうが。

この問いかけをもつて、本書の結びにかえたいと思います。

ね  
ネオン 68, 69, 93, 299, 300

は  
売薬(広告) 25, 28, 109, 171  
博報堂 26, 184, 192, 193, 293, 295  
博覧会 9, 79, 111, 144, 193, 197~212,  
214~224, 296, 297, 299  
『博覧会新聞』 197, 198, 200, 202~208,  
212, 217~219, 297

ひ  
引札 10, 11, 109, 130, 131, 222, 304  
百貨店 6, 67, 74, 104, 105, 107, 125, 201,  
214, 299  
ピラ 49, 52, 68, 100~102, 105, 107, 126~  
128, 221, 222

ふ  
プロテスタンティズム 31, 34, 35, 37, 40, 90  
プロテスタント 18, 34, 40, 41, 91, 92  
文案 85, 87, 107, 120, 131, 132, 299

へ  
勉強社 15, 28, 155~157, 171, 293

ほ  
倣蟻社 157, 181, 184, 185, 187, 193, 293  
ポスター 10, 48~53, 58, 59, 61, 62, 66,  
68~71, 73~75, 107, 144, 220~222, 239,  
295, 296, 298, 304  
本郷教会 81, 88, 89, 92, 98, 99, 240

ま  
毎日繁昌社 54, 55, 58, 71  
マンガ 134~141  
満洲 77, 112, 142, 146, 150, 152, 157, 158,  
161~166, 217, 249, 282, 283, 285~290,  
294, 295, 299  
『満洲日日新聞』 146, 150, 157, 163, 164,  
249, 282, 289, 295

万年社  
意匠部 21, 120  
考案部 21, 22, 62, 75, 87, 120, 121, 130,  
206, 296, 297  
顧問部 61, 62, 120, 130, 132, 295, 296  
京都支店 29, 117, 129, 197, 198, 202,  
203, 207, 208, 214, 215, 218, 219, 247,  
293, 294, 296~298  
東京支店 120, 293, 295, 297, 298, 301  
『万年社広告100年史』 62, 71, 75, 87, 94,  
130, 141, 150, 178, 184, 218  
万年社コレクション 8~11, 20, 26, 30,  
35, 36, 49, 52, 58, 62, 71, 72, 79, 91, 100~  
103, 107, 109, 113, 131, 132, 137, 141~  
144, 150~152, 156~158, 163, 165, 166,  
178, 185, 188, 190, 218, 219, 250, 278,  
279, 282, 304, 305  
『万年社創業録』 62, 69~73, 75, 83, 92,  
132, 178, 181, 193, 215, 218, 289, 298  
『万年社四十年史要』 30, 41, 84, 93, 182,  
192~194, 207, 218, 289, 298

み  
三越 71, 105, 124, 125, 155, 156, 201,  
214, 220, 294  
宮川経輝 33, 44, 82, 88, 91, 92, 96~98

め・も  
メディア・イベント 199, 214, 216, 303  
本山彦一 22, 40, 44, 198, 200, 202, 210,  
212, 215, 216, 219

よ  
洋行 14~16, 37, 48, 70, 83, 88, 89, 288, 289  
『読売新聞』 165, 241, 245, 297, 299

ら・れ  
ライオン歯磨 66, 88, 94, 124  
連合広告 8, 108~120, 122, 123, 125~  
127, 129~133, 137, 155, 156, 163, 164,  
166, 212~214, 219

す

図案 51, 57, 65, 73, 85, 87, 103, 105~  
107, 112, 119~122, 132, 144, 163, 222,  
298

水曜会 17, 19, 28~30, 79, 168, 169, 171,  
179~189, 194, 195, 296, 300, 301

崇貞学園 38, 39

せ

『盛京時報』 146, 162, 282~290

ゼネラルモーターズ →GM

「前進」 15, 39, 295

宣伝広告 93, 95

そ

総力戦 252, 255

た

第一広告社 183, 184, 187, 194

大大阪 70, 77, 144, 172, 191, 198~200,  
202, 203, 205, 208, 209, 216, 218, 219, 297

大大阪記念博覧会 144, 198~200, 202,  
203, 208, 209, 216, 218, 219, 297

大政翼賛会 252~257, 278

大東亜共栄圏 258, 271, 272, 275

大丸 97, 104, 105, 107, 124

『台湾新報』 150, 151, 293

高木貞衛 9, 14~19, 21~24, 27~45,  
48~53, 55, 58, 61~64, 69~73, 80~84,  
87, 88, 91, 92, 96~99, 152, 157, 178, 179,  
181, 192, 197, 207, 215, 216, 219, 225,  
227~229, 240~243, 282, 283, 291~296,  
299, 300

『高木貞衛翁伝』  
32, 33, 38, 39, 42, 81, 83, 92, 96

高木貞二 41, 44

高島屋 124, 221, 223

ち

地方紙 15, 25~28, 31, 50, 143, 144, 153,  
160, 161, 164, 165, 174, 190, 248, 292, 293

地方新聞社 36, 120

中外広告 29, 155, 157, 294

チラシ 100~105, 107

チラシ広告 100, 102, 103, 107

つ

通信業 21, 22, 25, 26, 40, 157

て

帝国通信社 170, 181, 183, 192, 194, 292

鉄道広告 50, 299

電気広告 50, 52, 61, 63

電車内広告 59, 62

電柱広告 292

電通 25~27, 37, 42, 89, 90, 95, 130, 133,  
164, 165, 177, 190~192, 195, 216, 278

と

『東京朝日新聞』 24, 92, 109, 137~139,  
141, 171, 176, 190, 191, 247, 248, 291, 294~  
296, 300

『東京日日新聞』 24, 92, 171, 190, 191,  
194, 198, 201, 202, 204~206, 209, 217, 219,  
247, 248, 295, 301

同志社 43, 44, 62, 83, 89, 98, 117, 118,  
159, 246, 247, 249, 250, 305

同盟会 28~30, 157, 178, 192, 193, 293

東洋広告 171

な

中川謙三 87, 299

中川静 22, 62, 63, 73, 75, 206, 218, 219,  
222, 297, 299

中川秀吉 251, 253, 295, 300, 301

中島真雄 152, 166, 282~287, 289, 290

中山太陽堂 93, 116, 191, 295

に

日浩社 15, 157, 193

日本組合基督教会  
38, 82, 88, 90, 91, 97, 98

日本弘業通信社 170, 181, 184, 293

日本宣伝文化協会  
251~258, 260, 276~280, 300, 301

日本電報通信社 89, 131, 157, 179, 187,  
190, 192~195, 204, 227, 278, 294, 295, 297,  
299 →電通

187, 190, 191, 207, 218, 247, 293, 298  
『京城日報』 122, 146, 150, 152, 154, 155, 158, 161, 294  
京阪電車 214, 294  
懸賞広告 104, 109, 113, 119, 124  
献納広告 252, 300  
幻灯広告 62, 63, 72, 292, 296  
健腦丸 124

こ

広告意匠 220~224, 228, 294, 296  
広告意匠博覧会 220~224, 296  
広告外交 218  
『広告界の今昔』 14, 16, 23, 36, 37, 41, 44, 62, 181, 192, 216, 219, 298  
広告観 55, 56, 70  
広告掲載料 225, 243  
広告研究 6, 7, 22, 49, 53~56, 63, 64, 66, 67, 69, 73~75, 101~103, 157, 192, 195, 196, 226, 233, 244, 253, 279, 294~296, 298  
広告浄化 297, 300  
広告税 63, 64, 66, 73, 300  
『広告大福帳』 53~58, 71  
広告代理業 14~21, 23, 25, 29, 30, 32, 34, 37, 40, 41, 43, 44, 59, 168~174, 177~181, 183~188, 190, 192~195, 218, 225, 243, 291, 292, 295, 297, 300  
広告代理店 8, 9, 52, 65, 71, 96, 97, 101, 103, 108~110, 115, 119, 122, 130, 142, 150, 153, 156, 157, 160, 161, 164, 165, 168, 176, 197, 203, 206, 207, 225~227, 246~250, 252, 253, 255, 282, 288  
広告塔 50, 58~60, 66, 67, 71, 72, 74  
広告取扱業 17, 19, 178, 179, 185, 190, 192, 194, 291, 293, 295, 300, 301  
『広告年鑑』 9, 22, 93, 197, 225~230, 234, 237, 238, 242~244, 297  
広告物取締 59, 66, 67, 72, 74, 75, 295  
『広告文化』 65, 66, 68, 74, 75, 94, 95  
広告漫画 134~137, 140, 141  
広告屋 17, 18, 20, 43, 44, 225  
広告料 19, 21, 26, 34, 40, 70, 116, 120, 157, 171, 175, 179, 184, 188, 192, 202, 210, 212, 229~235, 237~239, 241, 244, 245, 247, 248, 289, 294, 299~301

『広告論叢』 22, 62, 63, 66, 76, 84, 93, 102, 103, 132, 197, 226, 239, 245, 297, 300, 304  
広知社 181, 183  
神戸高等商業学校 22, 63, 75, 222  
国策 68, 163, 185, 186, 253~256, 275, 278, 300  
小崎弘道 81, 90, 94, 98  
誇大広告 21  
国家宣伝 9, 193, 251~254, 256, 257, 274~276, 278  
こども博覧会 197~207, 209~212, 214~218, 221, 297  
『こども毎日』 197, 198, 200~215, 217~219, 297  
小林富次郎 88, 89, 94, 98

さ

挿絵 236  
雑誌広告 9, 49, 50, 57, 63, 93, 134, 140, 193, 227, 229, 230, 244, 245, 299

し

GM 16, 77~80, 83~88, 91~94, 298  
執務講習会 107, 124, 207, 218  
清水安三 38  
『順天時報』 147, 152, 166, 282~287, 289, 294  
正路喜社 192, 243, 292, 297, 298  
商標 124  
商品陳列所 64~66, 164, 221, 223  
植民地 142~144, 150, 151, 163~165  
白木屋 109  
新興社 182~184, 186, 187, 194, 301  
仁丹 52, 62, 124, 125, 136, 137, 245, 294, 295  
新聞広告 7, 17, 22~24, 30, 48, 52, 57, 70, 73, 74, 86, 87, 93, 101~104, 107, 108, 111, 115, 116, 120~122, 129~133, 143, 144, 153, 158, 160, 161, 163~165, 177~179, 186, 188, 190, 192~194, 197, 198, 200, 206, 216, 218, 244~246, 248~250, 283, 288, 291~293, 296~298, 300, 303  
『新聞広告十七講』 22, 218

# 索引

	あ
旭広告	164, 181, 187~190, 295
	い
石川武美	237, 240~242
一新社	171
イルミネーション	293, 295
印刷業	65
	う
後川文蔵	18, 19, 218
	え
AE 制	16, 17
海老名弾正	81, 88, 92, 94, 95, 98, 241
『エホン ニッポン』	251, 256~258, 260~273, 276~278, 280
	お
『大阪朝日新聞』	15, 16, 20, 22, 24, 25, 28, 43~45, 62, 79, 85, 93, 108~113, 115, 118~120, 122, 123, 126~129, 131, 132, 141, 144, 152, 159, 165, 170~175, 181, 182, 190, 191, 191, 193, 199, 200, 204, 216~218, 247, 248, 292~294, 296, 298~300, 303
大阪教会	33, 37, 38, 44, 92, 97
大阪広告協会	63~70, 73~75, 91, 94, 95, 195, 256, 296, 298, 299, 301
大阪商科大学	74
大阪帝国通信社	183, 194
大阪電報通信社	164, 181, 185, 187, 188, 193~195, 295
『大阪毎日新聞』	15, 20, 22~25, 37, 43, 44, 54, 55, 57, 58, 62, 71, 79, 81, 84~86, 92, 93, 108, 112, 116, 118, 122, 123, 144, 164~166, 170~172, 175, 181~183, 190, 191, 193~195, 198~204, 206, 207, 209,

	210, 212, 215~217, 219, 220, 225, 247, 248, 292~296, 298, 299, 301
小川隆夫	297, 299
屋外広告	8, 48~59, 61~64, 66~70, 72~75, 93, 102, 103, 136, 244, 292, 295
	か
開進社	15
外地	112, 142, 153, 158, 159, 165
外務員	19~21, 35, 115, 131, 132, 207, 218
加藤直士	16, 68, 75, 80, 82~84, 86~96, 99
看板	48, 52, 61, 66~68, 70, 72, 73, 120, 184, 263, 267, 293, 295, 299
	き
菊正宗	124, 143
記事広告	210~212
亀甲萬	124, 125
給与	20, 31, 293
業界団体	14, 19, 28, 169, 178, 179, 182, 184, 189, 190, 195, 197, 256, 276, 295, 298, 300
キリスト教	19, 31~34, 38, 39, 80, 81, 88, 90~92, 94, 96~99, 240, 242, 298
金鶴香水	124
金水堂	15, 28, 110, 131, 156, 157, 181, 183, 186, 187, 193, 293
	く
空中宣伝	112, 126~128, 132
クラブ化粧品	124, 191, 239
クリスチャン	33, 38, 39, 83, 88, 91, 96, 99, 240~242
栗原伸	297
	け
京華社	17~19, 131, 164, 170, 181, 185,

樋口 摩 彌 (ひぐち・まや)

日本学術振興会特別研究員(PD) メディア史

「明治前期の京都新聞史(上) 木版印刷から活版印刷へ」(『メディア史研究』第37号、2015年)、「明治前期の京都新聞史(下) 活版印刷所から新聞社へ」(『メディア史研究』第38号、2015年)、「明治前期の京都における新聞・雑誌の印刷所の実態」(『書物・出版と社会変容』第18号、2015年)

石田あゆう (いしだ・あゆう)

桃山学院大学社会学部准教授 メディア文化論

『図説戦時下の化粧品広告1931-1943』(創元社、2016年)、「戦時婦人雑誌の広告メディア論」(青弓社、2015年)、「『若い女性』のための総合実用雑誌」(佐藤卓己編『青年と雑誌の黄金時代—若者はなぜそれを読んでいたのか』岩波書店、2015年)

中 嶋 晋 平 (なかじま・しんぺい)

大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター研究員 メディア史、マス・メディア論

「戦間期における地方紙の軍縮論—ワシントン会議前後の『京都日出新聞』の報道を事例に」(『都市文化研究』第12号、2010年)、「日露戦後の海軍と民衆—海軍記念日講話関係資料の分析を中心に」(『市大社会学』第13号、2012年)

華 京 碩 (か・きょうせき) Hua Jingshuo

龍谷大学社会学研究科在籍 植民地新聞史

「佐原篤介と満鉄子会社時期の『盛京時報』」(『龍谷大学大学院研究紀要』第20号、2012年)、「満洲における初期の新聞—『遠東報』と『盛京時報』の経営を中心に」(『龍谷大学社会学部紀要』第46号、2015年)、「満洲国時期の関東軍の新聞関与と中国語新聞」(『21世紀東アジア社会学』第8号、2016年)

大石 真澄 (おおいし・ますみ)

総合研究大学院大学文化科学研究科在籍 メディア論

「生理用品のテレビCMをめぐる理解とカテゴリー使用の実践—ハーヴィー・サックスの「成員カテゴリー化装置」を手がかりに」(『ソシオロジ』第60巻2号、2015年)、「多元化するゲーム文化の研究課題—利用と満足・ゲーム実践・メタゲーム」(『愛知淑徳大学論集 創造表現学部篇』第7号、2017年)

熊倉 一紗 (くまくら・かずさ)

京都造形芸術大学・同志社大学ほか非常勤講師 近代デザイン史、広告史

『明治・大正の広告メディア—〈正月用引札〉が語るもの』(吉川弘文館、2015年)、「観光と地域振興」「博覧会と広告」(高橋千晶・前川志織編『博覧会絵はがきとその時代』青弓社、2016年)、「陶治としてのポスター—選挙啓発ポスターコンクールのねらい」(『大正イマジュリイ』第10号、2015年)

松井 広志 (まつい・ひろし)

愛知淑徳大学創造表現学部講師 メディア論、文化社会学

『模型のメディア論』(青弓社、2017年)、「メディアの物質性と媒介性」(『マス・コミュニケーション研究』第87号、2015年)、「戦時下の兵器模型と空想兵器図解」(大塚英志編『動員のメディアミックス』、思文閣出版、2017年)

土屋 礼子 (つちや・れいこ)

早稲田大学政治経済学術院教授 メディア史、歴史社会学

『大衆紙の源流—明治期小新聞』(世界思想社、2002年)、「対日宣伝ビラが語る太平洋戦争」(吉川弘文館、2011年)、『占領期生活世相誌資料3 メディア新生活』(編著、新曜社、2016年)

木原 勝也 (きはら・かつや)

広告文化研究所主宰 広告ビジネス史、メディア・コミュニケーション論

「広告代理業黎明期の知られざる記録『萬年社創業録』の「発掘」とその史的価値」(『広告科学』第57集、日本広告学会、2012年)、「正史に残らなかった大阪の広告代理業秘話」(『日経広告研究所報』第271・272号、日経広告研究所、2013年)、「満洲国通信社の広告業進出を阻んだ大阪・日華社のプレゼンス」(『インテリジェンス』第17号、2017年)

村瀬 敬子 (むらせ・けいこ)

佛光大学社会学部准教授 歴史社会学、生活学

「「きょうの料理」にみる「伝統」の創造—テレビとジェンダーの社会学」(高井昌吏・谷本奈穂編『メディア文化を社会学する—歴史・ジェンダー・ナショナルリティ』世界思想社、2009年)、「〈家庭電化〉のディスプレイ—大正から昭和初期における電気の博覧会を中心に」(福間良明ほか編『博覧の世紀』梓出版、2009年)、「郷土料理／郷土食のジェンダー化—婦人雑誌における食関連情報を中心に」(『マス・コミュニケーション研究』第89号、2016年)

## 執筆者紹介

(論文収録順)

### 山本 武利 (やまもと・たけとし)

一橋大学・早稲田大学名誉教授 メディア史、インテリジェンス史

『広告の社会史』(法政大学出版局、1984年)、『日本の広告一人・時代・表現』(津金澤聰廣と共著、日本経済新聞社、1986年)、『現代広告学を学ぶ人のために』(編著、世界思想社、1998年)、『紙芝居一街角のメディア』(吉川弘文館、2000年)、『朝日新聞の中国侵略』(文藝春秋、2011年)、『G H Qの検閲・諜報・宣伝工作』(岩波書店、2013年)、『陸軍中野学校―「秘密工作員」養成機関の実像』(筑摩書房、2017年)

### 津金澤聰廣 (つがねさわ・としひろ)

関西学院大学名誉教授 メディア史、文化社会学

『近代日本の新聞広告と経営―朝日新聞を中心に』(山本武利ほかと共著、朝日新聞社、1979年)、『内閣情報部・情報宣伝研究資料』全8巻(共編・解説、柏書房、1994年)、『近代日本のメディア・イベント』(編著、同文館、1996年)、『現代日本メディア史の研究』(ミネルヴァ書房、1998年)、『戦時期日本のメディア・イベント』(有山輝雄と共編、世界思想社、1998年)、『広報・広告・プロパガンダ』(佐藤卓己と共編、ミネルヴァ書房、2003年)

### 竹内 幸絵 (たけうち・ゆきえ)

同志社大学社会学部教授 歴史社会学、広告史、デザイン史

『近代広告の誕生―ポスターがニューメディアだった頃』(青土社、2011年)、「二つの東京オリンピック」(坂上康博・高岡裕之編『幻の東京オリンピックとその時代―戦時期のスポーツ・都市・身体』青弓社、2009年)、「東京オリンピックプレ・イベントとしての赤と白の色彩―エンブレムとブレザーが喚起したナショナリズム」(朴順愛・谷川建司・山田奨治編『大衆文化とナショナリズム』森話社、2016年)

### 難波 功士 (なんば・こうじ)

関西学院大学社会学部教授 メディア史、広告論、文化社会学

『「撃ちてしまむ」―太平洋戦争と広告の技術者たち』(講談社、1998年)、『「広告」への社会学』(世界思想社、2000年)、『広告のクロノロジー―マスメディアの世紀を超えて』(世界思想社、2010年)、『人はなぜ「上京」するのか』(日本経済新聞出版、2012年)、『社会学ウシジマくん』(人文書院、2013年)、『「就活」の社会史』(祥伝社、2014年)

### 菅谷 富夫 (すがや・とみお)

大阪新美術館建設準備室研究主幹 近代デザイン史

「拡がる街、美術館の外へ／学芸員が描く都市と美術の関係」(鳴海邦碩ほか編『都市環境デザインの仕事』学芸出版社、2001年)、『デザイン史を学ぶクリティカル・ワークス』(橋本優子・肴倉睦子と共編著、フィルムアート社、2006年)、『デザインから大阪を見直す』(共著、大阪市都市工学情報センター、2011年)

こうこく よ あ  
広告の夜明け  
——おおさか まんねんしゃ コレクション けんきゅう 研究——

---

2017(平成29)年12月27日発行

編 者 竹内幸絵・難波功士

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-533-6860(代表)

---

装 幀 尾崎閑也(鷺草デザイン事務所)

印 刷 本 亜細亜印刷株式会社

---

©Printed in Japan

ISBN978-4-7842-1911-7 C3021